島根県邑智郡瑞穂町

琢道城跡発掘調査報告書

1992年3月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

琢道城跡航空写真(南上空より)

琢道城跡航空写真(西上空より)

序

瑞穂町には30有余の城跡、砦跡が確認されており、その数の多さに驚くばかりであります。その中には鎌倉時代に築城されたと伝わるニツ山城跡などつとに有名なものもありますが、その実態に迫る調査にはほとんど手がつけられておりません。

今回調査を実施した琢道城跡は、瑞穂砕石株式会社が従前より続けてきた砕石採集事業地内に所在する中世の山城の一つでありますが、この度砕石採集認可期限が終了し、新たに事業認可申請がなされたことに伴い、主郭部を発掘調査いたしました。その結果をここに報告致します。今後これら中世城跡研究の一助になればと期待をいたしているところであります。

尚、今回の調査にあたり、ご指導いただきました島根県教育委員会、また直接調査を担当して下さいました広島大学文学部河瀬先生をはじめ、お力添えをいただきました多くの方々に深甚の謝意を表するしだいであります。

平成4年3月

瑞穂町教育委員会

教育長　澤田隆之

例　　言

1. 本書は島根県邑智郡瑞穂町大字高見1656－1番地外における瑞穂砕石㈱の砕石採集事業に伴い、平成3年10月7日から11月30日にわたって実施した琢道城跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、瑞穂砕石㈱から委託を受けて瑞穂町教育委員会が実施した。

3. 本報告書の執筆、編集は河瀬正利の指導で森岡弘典が行った。なお、一部は河瀬が加筆した。

4. 本書掲載の図面作成は森岡弘典及び小林多恵が行った。

5. 本書に掲載の地形図（第2図）は国土地理院の承認を得て同院発行の25,000分の1を複製した瑞穂町管内図を使用したものである。

6. 本書8頁の地形図、13頁の郭群配置図に表示したX軸、Y軸は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。地形測量図、遺構実測図の矢印は磁北を示している。

7. 本書末尾には琢道城跡付近の字名一覧と分布図を掲載した。

8. 地形測量は測地技研㈱に委託した。

島根県邑智郡瑞穂町

琢道城跡発掘調査報告書

目　次

序

Ⅰ．はじめに…… 1頁

Ⅱ．琢道城跡の位置と環境…… 3頁

Ⅲ．調査の経過…… 7頁

　1．いままでの調査…… 7頁
　2．調査の方法と経過…… 7頁

Ⅳ．調査の概要…… 9頁

　1．第1郭…… 9頁
　2．第2郭…… 10頁
　3．第3郭…… 11頁

Ⅴ．まとめ…… 15頁

図版・挿図・表目次

図版第1　琢道城跡付近航空写真
図版第2　琢道城跡遠景
図版第3　琢道城跡遠景
図版第4　琢道城跡第1郭
図版第5　琢道城跡第1郭土層断面
図版第6　琢道城跡第1郭・第2郭
図版第7　琢道城跡第2郭
図版第8　琢道城跡第2郭
図版第9　琢道城跡第2郭
図版第10　琢道城跡第2郭・第3郭
図版第11　琢道城跡第3郭
図版第12　調査風景

第1図　瑞穂町と琢道城跡位置図……2頁
第2図　琢道城跡付近遺跡分布図（1：25,000）……6頁
第3図　琢道城跡付近地形図……8頁
第4図　第1郭平面実測図……10頁
第5図　第2郭平面実測図……11頁
第6図　第3郭平面実測図……12頁
第7図　琢道城跡郭群配置図……13頁
第8図　琢道城跡土層断面図……14頁
第9図　別当城跡縄張図……18頁
付図　琢道城跡付近字名分布図……21・22頁（折り込み）

付表　琢道城跡付近字名一覧表……23～24頁

Ⅰ はじめに

塚道城跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字1656－１番地およびその周辺に所在する中世の山城である。その山麓の馬場集落地内において、昭和47年より砕石採集事業が始められた。昭和51年には瑞穂砕石株式会社が経営権を譲り受け、現在まで砕石採集事業が続けられている。その間、昭和63年８月には塚道城跡本丸（第１郭）より派生する尾根を越えた通称新ケ迫において発掘調査を実施している。

ところで、平成３年７月26日をもって砕石採集認可期限が終了することになり、瑞穂砕石株式会社より島根県商工振興課に新たに砕石採集認可申請が提出された。

これに伴い、瑞穂町教育委員会は、島根県文化課の指導を受けながら、瑞穂砕石株式会社と計画変更等の協議を重ねたが、計画変更は困難との結論に達し、今回の認可申請地内に所在する塚道城跡の発掘調査を実施することとなった。

調査は平成３年10月７日から11月30日にわたり次の調査体制で実施した。

調査担当　河瀬正利（広島大学文学部助教授）
森岡弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）

調査指導　川原和人（島根県教育委員会文化課管理指導係長）
内田律雄（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）

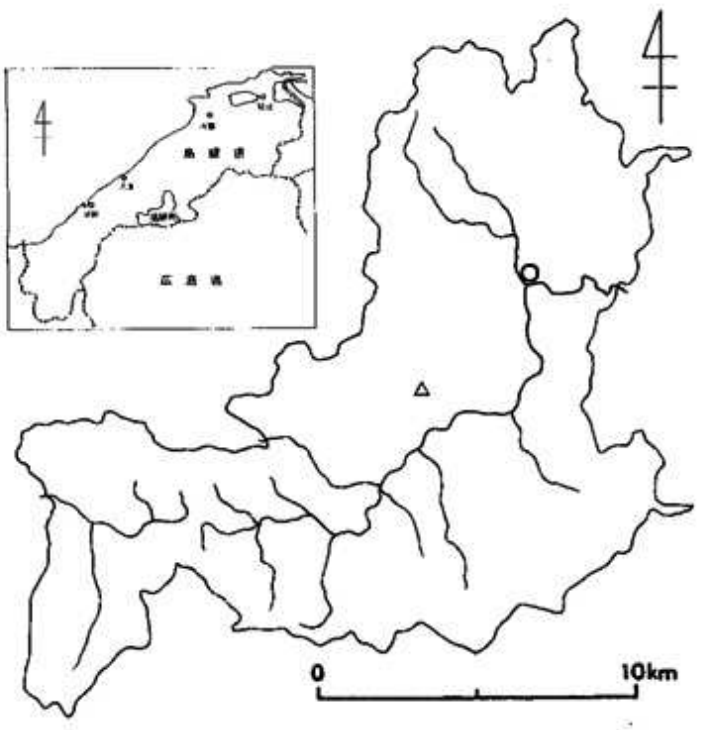
事務局　澤田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）
山本忠徳（瑞穂町教育委員会教育次長）
星野暢子（瑞穂町教育委員会教育次長補佐）
佐藤　勝（瑞穂町教育委員会教育次長補佐）
岡田公子（瑞穂町教育委員会職員）

発掘作業員　石川義明、漆谷　勉、大畑清兄、小糠米太郎、尾藤文江、金子綾子、国信勇之進、品川コミツ、洲濱軍太郎、高川秀夫、田中繁人、田中二二、戸津川里美、戸津川孝夫、久光花枝、平川正

寅、藤川守貴、松島利郎、三上カメノ、三上　寛、三上忠行、森田ユキエ、山中智恵子、山中良江

整理作業　　小林多恵（瑞穂町教育委員会）

なお、瑞穂砕石株式会社亀井正臣、三原清文両氏には、発掘調査を円滑に進めるため多大なご配慮とご協力をいただいた。また、調査にあたって古川正氏（島根県文化財保護指導員）、寺井毅氏（山陰中世城郭研究会）、桑野直夫氏、木邑恂氏、富永公美氏、山本史朗氏、三上憲昭氏（以上瑞穂町文化財保護審議会委員）、振井久之氏（大和村教育委員会）、森口正和氏（川本町教育委員会）、中田健一氏（石見町教育委員会）の方々から広範なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。



第1図　瑞穂町と琢道城跡(○印、△印は三ッ山城跡)位置図

II　琢道城跡の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。西南には標高600～800mの中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。

この県境に源を発する出羽川は、瑞穂町のほぼ中央を蛇行しながら南西から北東に向かって流れ、その流域には狭小な沖積平野や河岸段丘からなる出羽盆地を形成している。

また石見町境に聳える冠山（859m）に源を発する円ノ板川は高見地区で、火室山（652．3m）付近に源を発する高見川と合流し、その流域に小規模な沖積平野の高見盆地を形成し瑞穂町吉時で出羽川に合流する。出羽川はこの吉時付近で流路を東に変え、羽須美村口羽で中国地方最大の河川の江の川と合流する。

今回調査の対象となった琢道城跡は、この合流点の北東、出羽川、高見川の左岸（瑞穂町大字高見1656－1番地外）に位置する。麓の低地からの比高約100mの独立した丘陵尾根上に築かれた小規模な中世の山城である。

琢道城跡の頂上に立つと、眼下に高見盆地の全域を望むことができ、盆地東側山麓付近を流れる高見川沿いに、馬場集落、高見集落、荻原集落がほぼ南北に連なっている。その北に眼をやると小笠原氏の属城荻原城跡（安城）や、川本町方面から高見に通じる延峠を遠望することができる。また西側は、黒岩城跡や石見町から高見に通じる荷メ峠と安田集落を望むことができ、南側は出羽盆地の下流域が望まれる。盆地中央を流れる出羽川右岸丘陵上に別当城跡があり、また左岸丘陵には大宝寺城跡、宇山城跡群などが位置している。琢道城跡からはこれらの城跡を指呼の間に見わたすことができる。

また、高見付近は、基盤が高見第三紀層と呼ばれる海成層で形成されており、第三紀中新世の化石が産出することから地質学上からも注目されている地域である。

ところで瑞穂町内の遺跡、遺物については『島根県遺跡地図（石見編）』[(1)]や『瑞穂町内遺跡分布図』[(2)]によれば、現在のところ約500ケ所確認されている。その多くが中近世の製鉄遺跡であるが、時期的には旧石器時代から歴史時代に至るまでのものがある。

旧石器時代の遺跡では、琢道城跡とは高見川を挟んで対岸に位置する横道遺跡[(3)]や

荒嶺遺跡（岩屋）があげられる。また、近年中国横断自動車道の工事に先行して調査された堀田上遺跡[4]（市木）でも旧石器時代に遡る石器が確認されている。横道遺跡は1982年の詳細分布調査によると、丘陵頂部において姶良Tn火山灰の下から流紋岩製の石核、剥片類が出土している。遺構など明らかではないが、後期旧石器時代前半の石器群が存在すると思われる。

つぎに縄文時代の遺跡では、前述の横道遺跡や中国横断自動車道の工事に伴って調査された郷路橋遺跡、堀田上遺跡をはじめ町内各地で相当数の遺跡が明らかになりつつある。

弥生時代の遺跡には、牛塚原遺跡（上亀谷）、順庵原遺跡（下亀谷）、馬場山遺跡（下亀谷）、長尾原遺跡（淀原）、野田西遺跡（上亀谷）などがあり、出羽川の南側に位置する比高約10～30mの丘陵部をはじめとして、流域各地に分布するようになる。1991年に発掘調査がなされた馬場山遺跡では、当地方で初めての弥生時代後期の掘立柱建物群が確認されている。また、この馬場山遺跡、順庵原遺跡に隣接して、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓の順庵原１号墓[5]が築かれている。

古墳時代になると遺跡はさらに増えてくる。集落関係の遺跡では、長尾原遺跡、順庵原Ｂ遺跡、宇山遺跡（上原）、倉谷遺跡（高見）、野田西遺跡、狼原遺跡（和田）などがある。

このほか、古墳時代から奈良、平安時代にいたる須恵器の窯あとも数多く確認されており、島根県でも有数の須恵器の生産地として注目されている。

歴史時代の遺跡では、古代の須恵器窯跡群のほか、中世の山城や中近世の製鉄遺跡がある。山城では鎌倉時代に富永（出羽）氏が築城したといわれる二ツ山城跡や宇山城跡群（毛城、赤城、白鹿城、信友城、樹光城、上俵城）をはじめ高橋氏、本城氏の本城跡、別当城跡、小笠原氏の布施城跡、銭宝城跡、堀氏の堀城跡や今回調査の対象となった琢道城跡など現在32ケ所の山城跡や砦跡の所在が確認されている。その他にも山城跡や砦跡と伝えられているものが数ケ所分布している。

二ツ山城跡は瑞穂町に所在する山城の中では最大規模を誇り、その築城は貞応２年（1223年）と伝えられ、記録でみるかぎりでは益田七尾城跡（建久４年＝1193年）についで石見国では２番目に古い城である。東西方向に対峙する２つの最高所は東の丸（522.0m）、西の丸（530.8m）と呼ばれ、それらを中心に泉水の段、お蔵の段、馬場、駄屋の段など多くの郭群や加工段、土塁、空堀、竪堀が良好な状態で残

されている[6]。1989年の二ツ山城南側山腹部の竪堀跡確認調査によると、竪堀の幅は8m、深さ5mもあり[7]、その規模からしてしっかりしたつくりの城であったことがうかがえる。

また、本城跡は阿須那（邑智郡羽須美村阿須那）に本拠地を置く高橋氏が正平16年（1361年）、出羽合戦により富永（出羽）氏を破り二ツ山城の東側に相対峙するように築いた城で標高480mの独立した丘陵上に位置している。享禄2年（1529年）毛利氏により滅亡するまでの居城とされている。高橋氏滅亡後毛利氏により頂上の削平地（本丸）は堀切により破壊されている。

別当城跡は、高原地区和田集落背後の標高437.3mの丘陵上に築城された山城で、頂上より西及び南北に向かって派生する尾根上に20数余の郭が設けられている。瑞穂町内では二ツ山城や本城に次いで規模の大きな城であり、永禄元年（1558年）毛利と尼子の合戦の舞台となった城と伝えられている。

このほか中国横断自動車道の工事にともない市木地区の滝ノ屋谷城跡、桜尾城跡の発掘調査が実施されている。

つぎに中近世の製鉄関係遺跡では、製錬場である鉧跡や大鍛冶屋跡が数多く分布する。その数は300ケ所以上に及び今後調査が進めば500ケ所をこえると推定される。

また、砂鉄採集の鉄穴場跡、切羽跡は瑞穂町内全域に分布しており、製鉄が盛んに行われていたことがうかがえる。その豊富で良質な鉄資源を背景に中世から近世にかけて多くの刀工が存在していたことが知られている。その中には相州正宗十哲の一人初代出羽直綱など著名な刀工も輩出している。また、豊富な鉄資源は刀工のみならず、在地豪族にも大きな魅力であり群雄割拠する豪族が鉄をめぐる争奪を繰り返していたことも想像に難くはない。近世になると「出羽鋼」と呼ばれる良質の鋼を産出し全国に供給していたことが知られている。今佐屋山遺跡のような古墳時代の製鉄炉から近世の大規模な地下構造をもつ永代鉧の出現する過程については今なお明確ではないが、1989年に調査された下稲迫遺跡（上田所）、清造山遺跡（上田所）などの炉床構造は、近世鉧の大がかりな地下構造が出現する以前の鉧遺構として貴重である[8]。

注

(1) 島根県教育委員会　『島根県遺跡地図（石見編）』（1988年）。

(2) 瑞穂町教育委員会　『瑞穂町内遺跡分布図』（Ⅰ～Ⅵ1985. 1989. 1990. 1991年）。

(3) 河瀬正利編　『横道遺跡－詳細分布調査概報－』（島根県邑智郡瑞穂町教育委員会　1983年）。

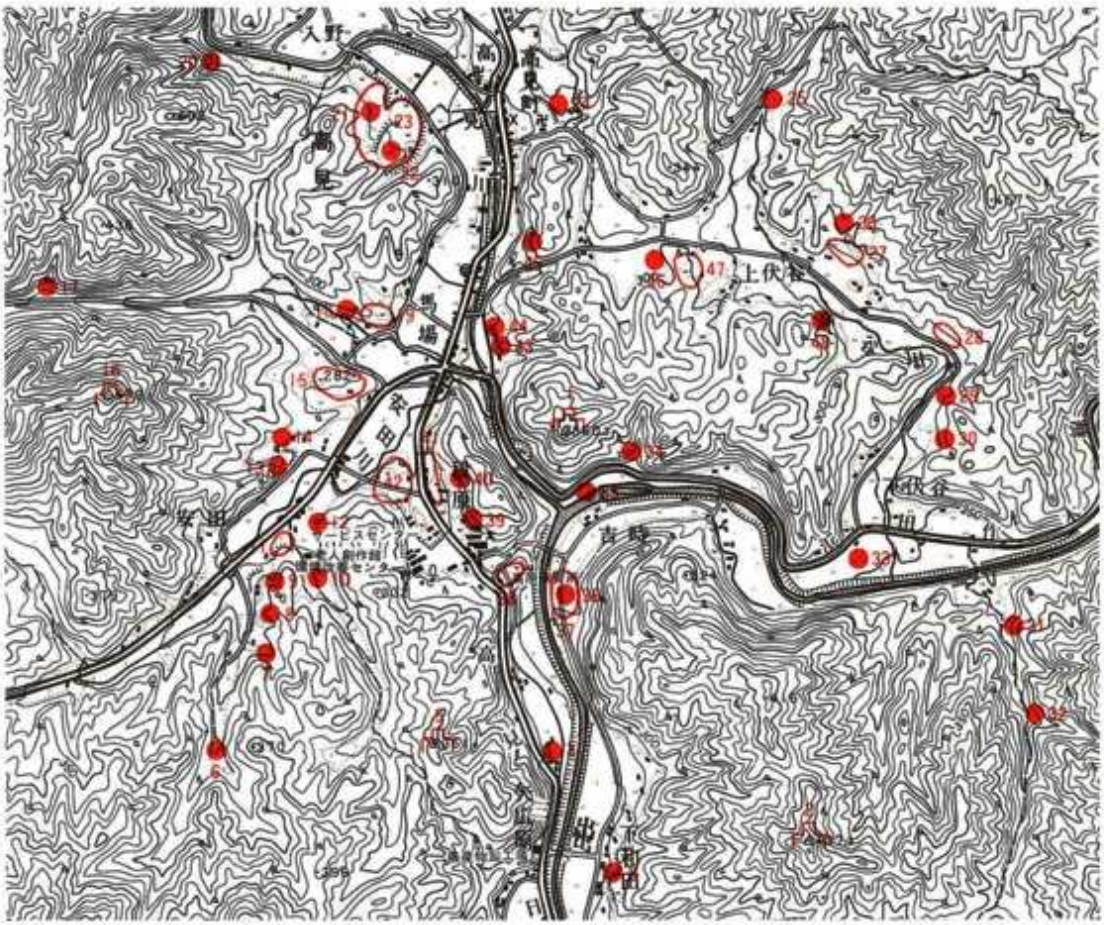
(4) 角田徳幸編 『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（島根県教育委員会 1991年）。

(5) 門脇俊彦 「願庵原1号墳について」（『島根県文化財調査報告』第7集島根県教育委員会 1971年）。

(6) 1987年に瑞穂町文化研究会が実施した地形測量図による。

(7) 吉川正 『多目的保安林総合整備事業に伴う二ツ山城跡竪堀確認調査概報』（瑞穂町教育委員会 1989年）。

(8) 広島大学文学部考古学研究室による発掘調査資料による。なお、瑞穂町内の遺跡の概要については、『瑞穂町誌』第1集（1964年）、第2集（1966年）、第3集（1976年）によるところが大きい。



第2図 琢道城跡付近遺跡分布図（1 : 25000）

1. 琢道城跡
2. 別当城跡
3. 瀬戸遺跡
4. 矢広原古墳
5. 宝大寺城跡
6. 姫の墓伝承地
7. 越道古墓群
8. 堂ケ迫大鍛冶跡
9. 堂ケ迫寺院跡
10. 実光奥鉧跡
11. 安田遺跡
12. 安田古墓群
13. 洞良庵跡
14. 竹屋田出口遺跡
15. 賀茂山遺跡
16. 黒岩城跡
17. 野鍛冶屋鉧跡
18. 馬場大鍛冶跡
19. 八幡山遺跡
20. 坂本野鍛冶跡
21. 田窪瓦窯跡
22. 下二谷瓦窯跡
23. 重石遺跡
24. 野鍛冶大鍛冶屋跡
25. 田ノ原坂遺跡
26. 大字根古墳
27. 大字根遺跡
28. 倉谷遺跡
29. 大原鉧跡
30. 登尾鉧跡
31. 青松ワル谷1号鉧跡
32. 青松ワル谷2号鉧跡
33. 塚田古墳
34. 吉時1号鉧跡
35. 吉時2号鉧跡
36. 塚原古墳
37. 塚田遺跡
38. 横道遺跡
39. 高原神社跡
40. 段ノ原古墳
41. 段ノ原B遺跡
42. 段ノ原A遺跡
43. 寺山遺跡
44. 盛椿寺跡
45. 高見古墳
46. 上伏谷瓦窯跡
47. 宮原遺跡
48. 鉧床鉧跡

Ⅲ 調査の経過

1．いままでの調査

今回発掘調査を行った琢道城跡は、瑞穂町の出羽盆地の最北端の高見地区に位置する。この高見付近は、高見第三紀層と呼ばれる地層によって構成されているが、琢道城跡の所在する丘陵の基盤は、砂岩や泥岩などの堆積岩からなり、これらの岩石類が、土木工事用の材料として極めて良好であることから、昭和47年（1972年）から丘陵の山麓部を中心に砕石採取が始められている。これは、わが国経済の高度成長のもと国土の開発事業が激増したことによることのほか、島根県西部地方が毎年のようにみまわれる集中豪雨による被害の復旧工事の実施による土木工事用砕石の需用が急増したからでもあった。

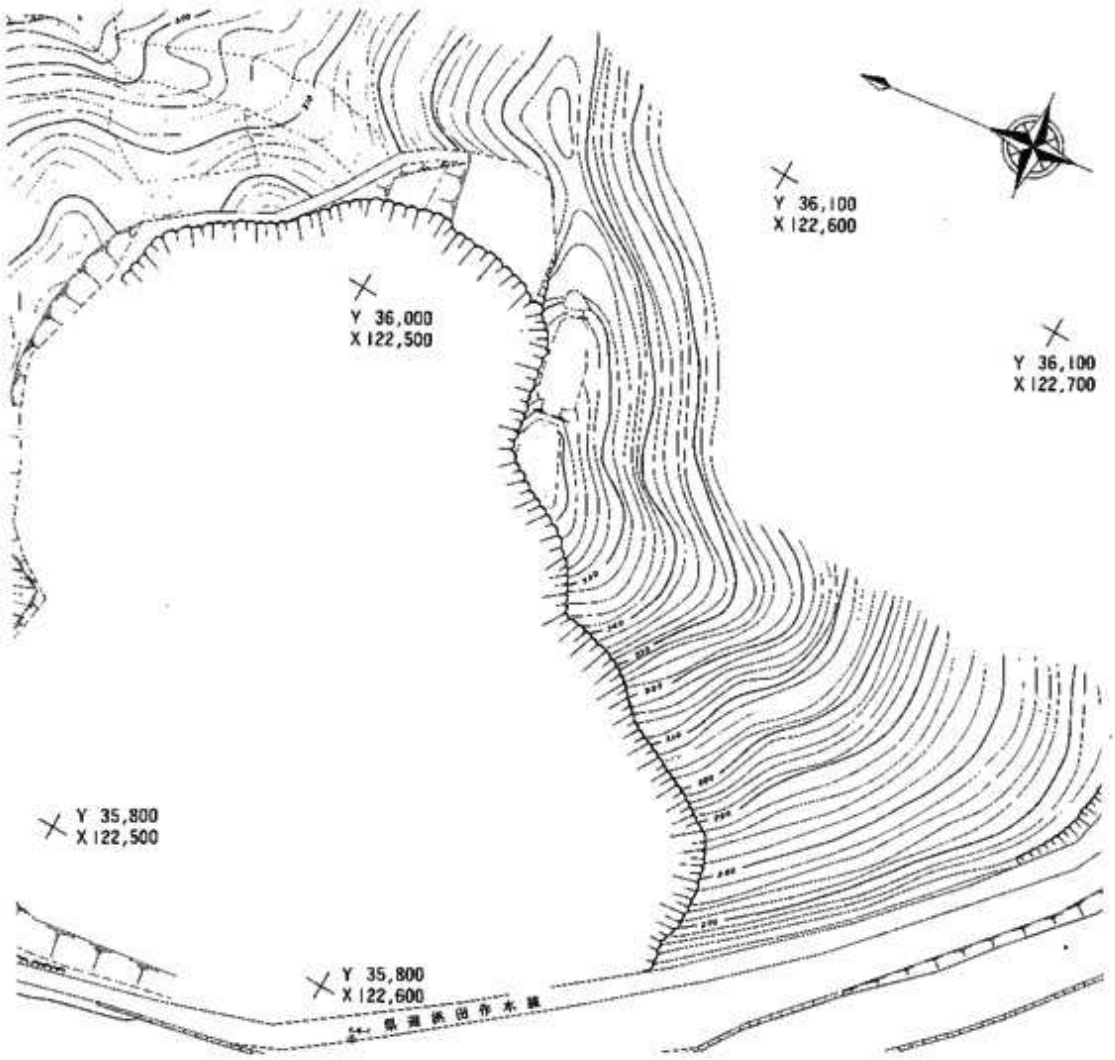
砕石業法によると砕石採集認可期限は3年とされており、砕石採集業者は3年ごとに認可申請をすることが必要である。昭和47年から始まった琢道城跡の所在する丘陵一帯での砕石採集事業も3年ごとに認可申請を行い、現在まで採集事業が続けられてきたところであるが、砕石採集事業の拡大とともに砕石採集の範囲もしだいに琢道城跡の中心部に迫ってくることは当然であった。こうした砕石採集事業の拡大に伴い、昭和63年（1988年）8月には、琢道城跡本丸（第1郭）より北へ派生する丘陵の一部、通称新ケ迫地区がその採集範囲に含まれることとなった。

瑞穂町教育委員会では城郭遺構の存在の有無を確認するための第1次発掘調査（吉川正氏担当）を行った(1)。調査は、遺構の存在が予想される地域に2ケ所の調査区を設定して実施したが、城に関係する遺構も遺物も検出されなかった。この第1次調査の結果をうけて砕石採集事業はその後も継続されてきたが、この時の認可期限が平成3年（1991年）7月には終了することから、今回新たに砕石採集認可申請が提出された。申請書によると琢道城跡の郭群は全て申請範囲に含まれると考えられたので、今回の第2次の発掘調査が必要となったのである。

注 (1) 瑞穂町教育委員会『琢道城跡発掘調査概報』1989年。

2．調査の方法と経過

今回調査区内に3段の削平地を確認しており、便宜的に最上段から東へ向け第1



第3図　琢道城跡付近地形図（1：2500）

郭、第2郭、第3郭と呼称し、調査区全体に原則として一辺10mのグリッドを設定して調査を実施した。形状を勘案し第3郭は四分法で調査した。測量は全体地形図の場合は200分の1、各郭単位の全体遺構実測図は100分の1、個々に検出された遺構及び土層図は20分の1のスケールで作成することとした。発掘調査は丘陵尾根の最高所に位置する第1郭から実施し、順次第2郭、第3郭へと進めていき、第1郭から第3郭方向（東西方向）へ約70m、幅50m、南北方向に約10～13m、幅50mのセクションベルトを残し調査を行った。厚さ約10～20mの表土を除去すると地山の風化土となり、その色調は概ね第1郭で赤黄色土、第2郭、第3郭で黄褐色土であった。また第1郭、第2郭では一部盛土により平坦面をつくりだしていた。

Ⅳ 調査の概要

調査前の表面観察で丘陵上に三段の削平地が確認されたので、この削平地の存在する東西約70mは全面発掘調査することとした。第３郭についてはその一部が開発区域外であるので、その部分は発掘調査の対象外とした。

なお、第３郭から東へ伸びる尾根及び各郭の南側斜面についても調査したが、竪堀、空堀、石垣、加工段など琢道城跡につながる遺構は確認できなかった。

さらに、調査区北側は砕石採集のためすでに消滅しており、遺構の存在の有無など知る由はないが、以前は山頂から約30m下ったところに堀切が存在したといわれている。

また調査区の北側は砕石採集による切羽が迫っており、麓との比高差が約80mもあるので、発掘調査の安全を確保するため、切羽の上端部より内側約１～２ｍを調査対象から除外した。

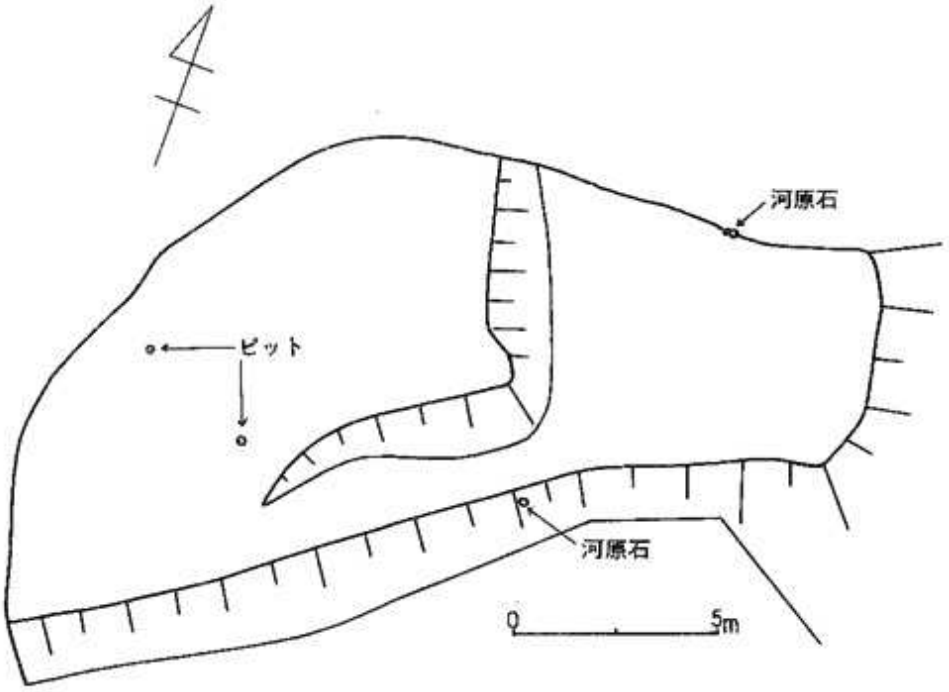
なお、今回の発掘調査では土器などの遺物は全く出土しなかったし、焼土面や炭化物なども検出されなかった。つぎに各郭の調査概要について述べておきたい。

１．【第１郭】

標高360mの丘陵尾根の最高所に位置する。尾根筋を東西に向かって平坦に加工した削平地である。

平面形はほぼ台形に近い形を呈している。東西方向に約21m、南北方向に約12mの規模があり、中央付近で約60cmの段差により東西２つの平坦面に分けられる。下段は東側へ約14％の緩かな勾配で傾斜している。郭の南側からは通路状の平坦面を検出した。幅は約１～２ｍで緩かな勾配で東側へ傾斜している。調査区北斜面は砕石採集の切羽により消滅しており詳細については不明であるが、東側斜面は地盤削平時の残土を周囲に盛土して平坦面を確保している。

また、上部平坦面で２ケ所のピット（径20～25cm、深さ20～25cm）、下部平坦面で河原石３ケを検出したが、それらが柵列や建物跡につながるかは確認できなかった。



第4図　第1郭平面実測図

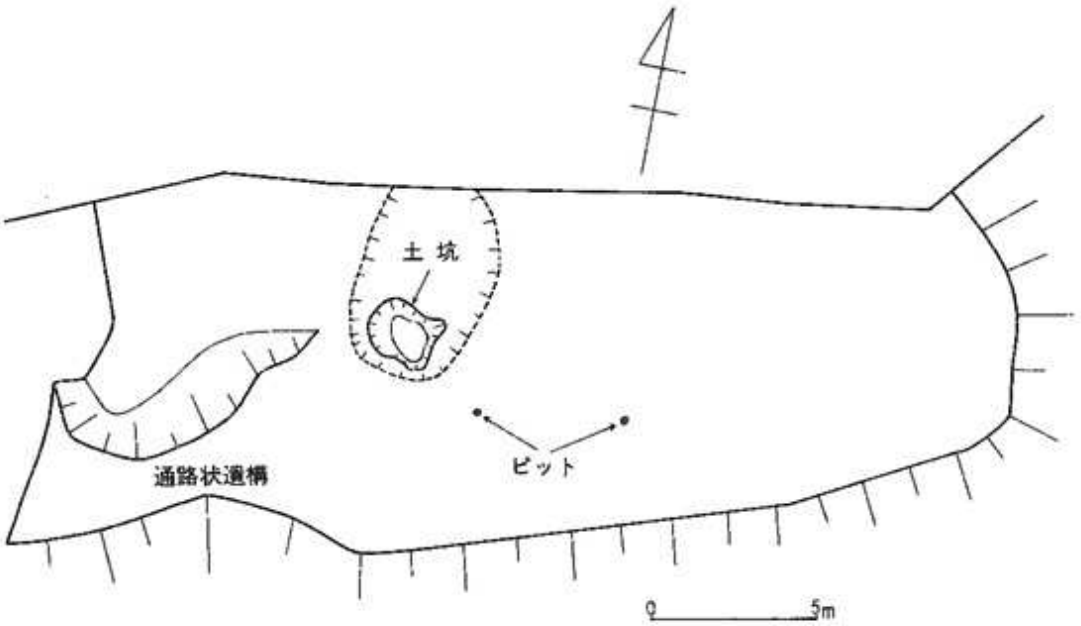
2．【第2郭】

第2郭は第1郭の東側下方約7mに位置し、第1郭との比高差は約5mである。

平面形はほぼ長方形を呈し、東西約28m、南北約8～13mで、調査を行った3つの郭の中で最大の規模をもっている。

第1郭から東側へ伸びる尾根を約38度の傾斜で削りだし、第1郭と第2郭の間をしっかりした切岸により仕切っている。また、第2郭の東端では約50cmの段差をもたして東西約3m、南北約8mの平坦面を設けている。第1郭と同様北側は消滅していて詳細は不明であるが、東側および南側斜面は削平時の残土で盛土し平坦面を確保している。

郭の中央西寄りで土坑を、中央南寄りでピット2ケ所を検出した。土坑は東西約4m、南北約6m、深さ約20cmの楕円形の掘込みの中に位置し、上縁径約260cm×210cm、底径約100cm、深さ約35～45cmで底部はほぼ平坦である。この土坑に伴う出土遺物はなく、性格は不明である。ピットはそれぞれ径20～25cm、深さ10～15cmであるが、第1郭と同様柵列や建物跡につながるものかは確認できなかった。



第5図　第2郭平面実測図

また、郭の東南部には土塁状の高まりがつくられている。地山を削りだしてつくられており盛土された形跡はない。この土塁状の高まりは、第1郭と第2郭を仕切る斜面の法尻より東西に延び、長さ約9m、幅1.5m～5mで、平坦面からの高さは約80cmで東側に向かって幅が広くなっている。

おそらく、第1郭と第2郭を結ぶ通路であると思われる。なお、第1郭と第2郭を仕切る斜面には通路状の遺構を検出することができなかった。

3．【第3郭】

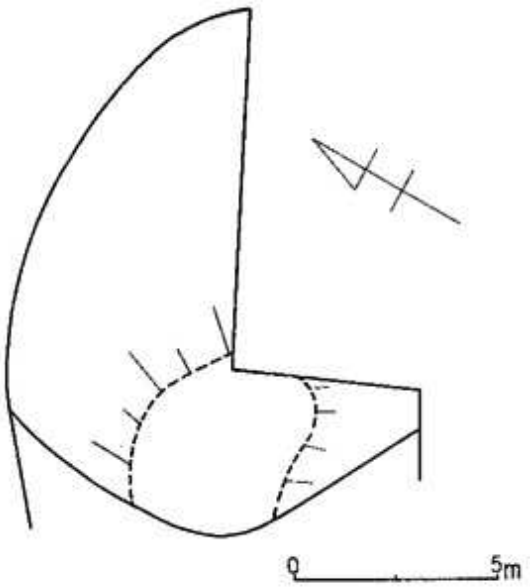
第3郭は第2郭の北東下約4mに位置し、第2郭との比高差約4.3m、第1郭との比高差は9.3mである。

平面形は卵形を呈し東西約4.5m、南北約4mで規模の小さい郭である。

第2郭から連なる尾根を約43度の傾斜で削り出し、しっかりした切岸を設けている。しかし、第1郭、第2郭のように削平時の残土等で盛土し平坦面を確保する方法を採らず、地山を削平し狭小な平坦面を設けているだけである。

なお、第3郭からは土坑やピットなどの遺構検出されなかった。また、以前には第2郭と第3郭の間には空堀が存在するとされていたが、表土の下は堅い地山であ

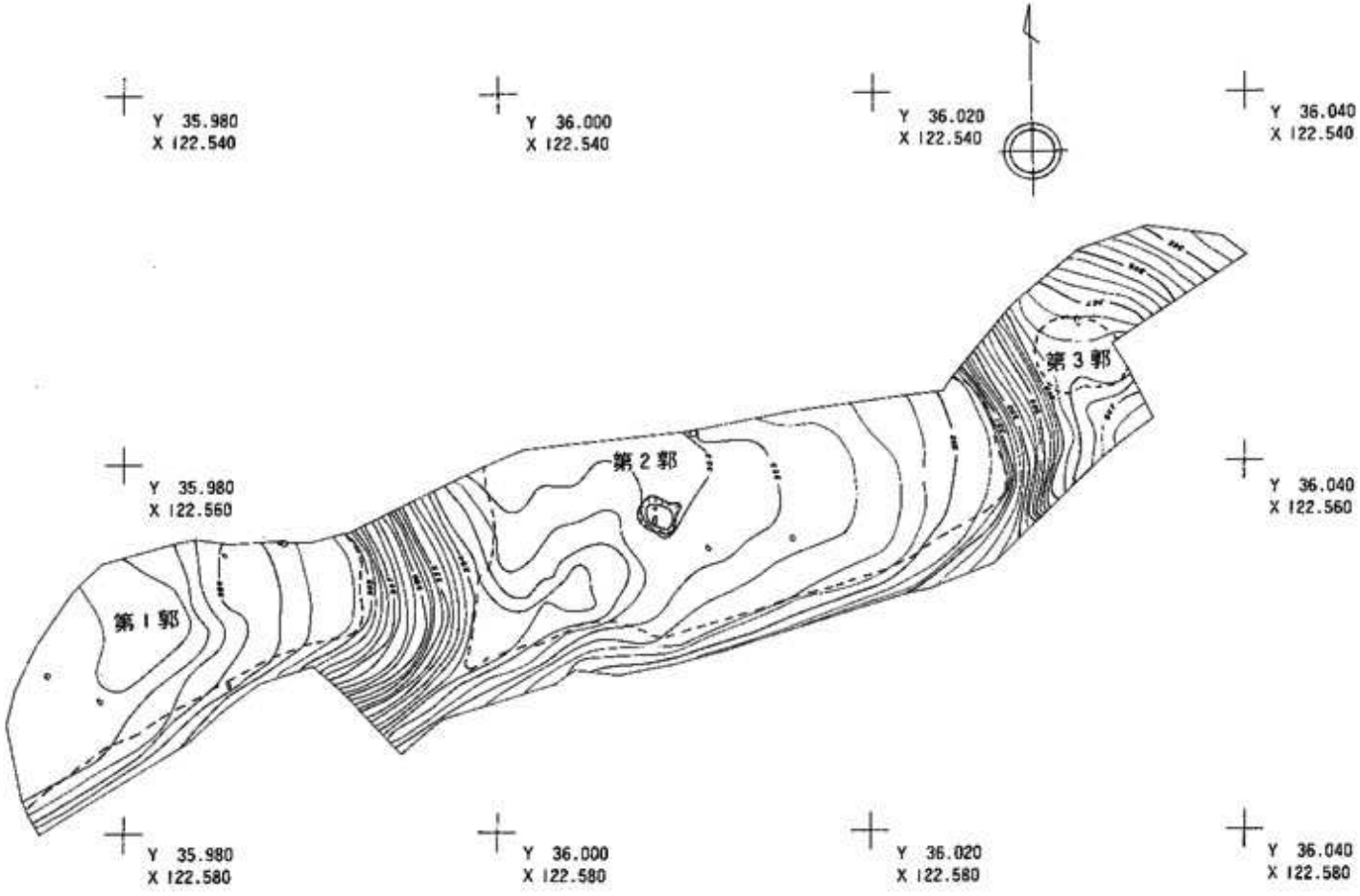
り堀切などは検出されなかった。



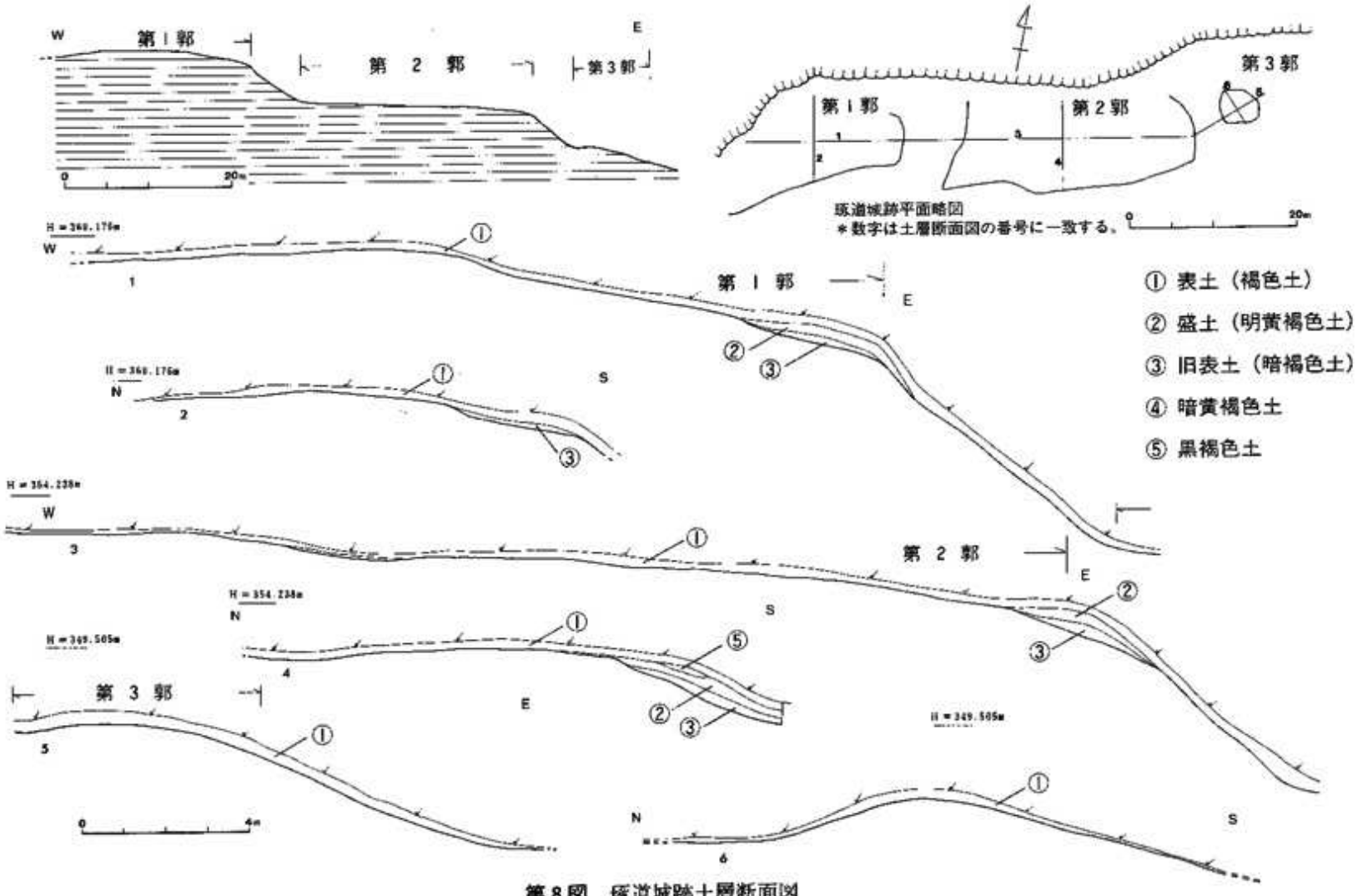
第6図　第3郭平面実測図

【小　結】

昭和40年代後半より始められた砕石採集事業により、丘陵尾根の北西部が地形変更を受けており、塚道城跡の全容については不明であるが、今回の発掘調査で小規模な3つの郭とそれに伴う若干の遺構が検出された。しかし、出土遺物もなく、焼土や炭化物なども検出されなかった。このため本城跡の築城時期や廃城の年代を特定することはできなかった。城の構造についてみても加工は少なく、平坦面も不整形できわめて簡略に造られた城と推定された。このことからすると、この城は陣立てするような構えをもった城ではなく、戦闘の最前線の見張り所的な城であったと想定される。



第7図　琢道城跡郭群配置図(1：400)



第８図　琢道城跡土層断面図

V　ま　と　め

今回の邑智郡瑞穂町の琢道城跡の発掘調査では、城郭の中心部の第1郭、第2郭、第3郭の規模、構造を明らかにすることができた。各郭は、小規模であり、郭内からは工作物の一部かと推定されるピットと土坑を検出することができたが、遺物などは全く出土しなかった。山城跡としての構造は簡略で、常時、兵力が滞陣したとは考えられない城郭であったといえよう。ただ、城地の選定にあたっては、江の川支流の出羽川、高見川の合流点に位置し、しかも四周への交通の要衝にあたっていることから推測して戦略的にきわめて重要な地域を選定していることが考えられ、戦時における最前線の見張り所あるいは砦的な性格をもった城郭と推定される。

現在、瑞穂町内には、32ケ所の山城跡、砦跡が確認されている[1]。その多くは未調査であり、文献からの検証も進んでいないため、築城者や築城年代についても明らかでない。このため瑞穂町域における中世武士団の動向についても不明である。したがって琢道城跡の築城年代や築城者（居城者）、さらには政治的動向の中での位置ずけなどについては、今後の考古学的調査や文献資料の調査、研究の進展を待って改めて検討することが必要であるが、ここでは、今回の発掘調査によって得られた資料をもとに琢道城跡の構造、性格などについてまとめておきたい。

1．文献からみた琢道城跡

『石見誌』によると琢道城の城主は椿能登守政盛と記載されている[2]。この椿政盛について同書は「明應年中政椿寺開基（本城常光家老椿雅楽助父カ）晩年中野村ニ終ル。墓ハ同村字別所椿氏（屋号西ケ内）ノ畑ニアリ、嶺椿院殿前能州琢道剛巌大居士」としている。『石見誌』の記載内容については原史料が明らかでなく検証はできないが、琢道城跡の北側丘陵麓には椿氏の菩提寺であったとされる盛椿寺がかつては所在し、椿姓の家も現在、瑞穂町高原地区と石見町中野地区を中心にみられることから考えて『石見誌』記載内容もかなり信頼してよい。『石見誌』を肯定すると明応年中（1492～1501年）頃に本城（高橋）常光に繋がるとみられる椿政盛の支配下にあったことになる。本城常光は、尼子氏の有力武将として、戦国期には出

雲国須佐（簸川郡佐田町）の領主となっており[3]、とくに、永禄元年（1558年）から永禄5年（1562年）まで尼子氏が石見銀山の領有権を一時毛利氏から奪い返したときは、その守備に当たったとされる[4]。

琢道城がこの本城（高橋）氏に係る家臣が築城（居城）したとする証拠はないが、琢道城の所在する瑞穂町高原地区が陰陽連絡の要衝としてきわめて重要な位置を占めていたことは疑いない。

ところで高橋氏は、南北朝の争乱期には北朝方として戦に参加し、邑智町青杉ケ城の戦いの功により羽須美村阿須那と口羽の地頭として阿須那に来住している。その後高橋氏は、足利氏と提携し南朝方に転じ、正平16年（1361年）には出羽氏の拠る二ツ山城を攻めて落城させ、出羽氏を君谷へ退かせている[5]。そして二ツ山城の向い側に対峙するように本城を築き、15世紀後半の応仁の乱以後は石見南東部から安芸西北部に及ぶ地域を領有するほどの勢力を誇っている[6]。これは先述したように、この地域が陰陽を結ぶ交通の要衝に位置していたことのほか、砂鉄を原料とする鉄生産の一大生産地であつたことによるものであろう。

このように15世紀には芸石両国にまたがって一大勢力を誇った高橋氏も戦国期において尼子氏と大内（毛利）氏の争乱のなか享禄2年（1529年）頃には滅亡している[7]。こうした動向から推測すると琢道城が城地として選定され、縄張りが始められたのは高橋氏が邑智郡一円を支配下に治めた15世紀後半頃と考えられ、『石見誌』の年代とも矛盾しない。

ところで、琢道城跡の所在地およびその周辺の字名を見てみると（付表および付図参照）、琢道城跡の所在する地域は「丹戸城」とあり、高原地区の字名で「琢道城」に繋がる字名はみられない。この丹戸城ついて『邑智郡誌』では、「丹戸城高見次郎（小笠原支族）の居城」とあり、丹戸城の城主は高見次郎としている[8]。高見次郎は『川本町誌』によれば小笠原氏第6代小笠原長教（1441年没）の次男長勝のことで、「嘉吉の変で赤松満祐を播磨に攻めて武勇を挙げ、石見次郎と称せられる」と記している[9]。高見次郎の没年は不詳であるが、嘉吉の乱（1441年）や長兄小笠原長性の没年（1443年）などからすると丹戸城の城主であった時期は1440～1450年前後であったことになる。小笠原氏は邑智郡川本町を本拠にする国人領主であり、その領域は、川本町を中心に石見町井原、瑞穂町北部の布施、八色石、高見の一部に及んでいたとされる。『石見誌』にみえる琢道城と『邑智郡誌』にみえる丹戸城

が同じ城主を示すものか否かについては、両誌ともその出典の原史料を明確にしていないため明らかにできないが、ここでは字名からみて本来「丹戸城」と呼称されていたものがのちに「たんど」から「たくどう」へ転化したものと想定しておきたい。そしてまた、はじめにも述べたとおり、郭の配置からみて琢道城が戦時における見張所あるいは砦的な性格をもつと推定されることから、15世紀後半における高橋氏と小笠原氏の領域拡大争いの中で最前線の軍事施設として、時には小笠原氏のまたある時には高橋氏の配下にあったと推定できそうである。

2．構造からみた琢道城跡の性格

琢道城は、低地からの比高約100mの独立した丘陵尾根上に築かれた山城で、第1郭から第3郭までの3つの郭から構成されている。かつては北側山麓部に空堀が存在したといわれているが、他に空堀や土塁などはみられず構造的にはあまり加工を施さない小規模な山城である。したがってこの山城に多くの兵が駐留することは不可能で、いわゆる「本城」や「陣城」とは呼べないものである。

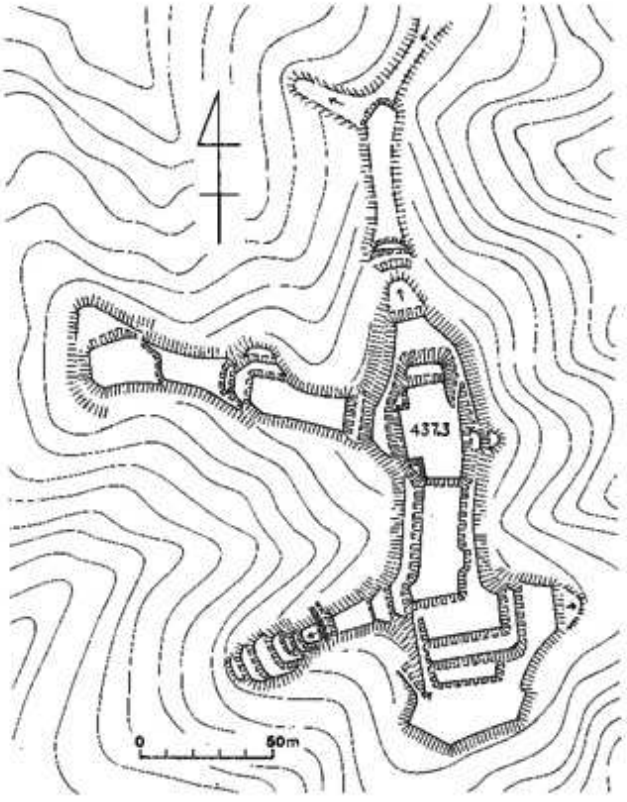
ところで中世の山城の形態をみると大きく土居型式のものと山城型式のものに区分される[09]。土居型式の山城は、谷奥の独立丘陵や丘陵先端部を利用して築城しており、規模は小さいが城の周囲には、人工の堀割や塀の役目を果たす自然の河川、城主の屋敷跡や菩提所の跡などがある。形態としては守りに易い単郭型をなすものが多く、なかには日常の居館として使用されている場合もみられる。一方、山城型の城は、山頂部を利用して築かれた典型的な山城である。独立した一つの山につくられたものや、連山の一つの峰もしくはいくつかの峰を利用して築かれたものなどがある。一般的に要害の地にある自然の山を利用してつくられており、山頂から山麓にかけて多くの郭や堀切、井戸などを配している。細かくみると山城型式の山城も①自然の山を削平したり掘り切ったりし、菩提所、居館などを山麓に設けているものと②石垣や石積みを採用し、菩提所や居館なども山上に設けるようになってきたものの2つに分類される。

時期的には、土居型式の山城は、領主として領内の政治的支配体制が確立していない時期（鎌倉時代後半）に築かれたものが多い。一方、山城型の山城では、1類としたものは、領主としての勢力が伸張し、領主間の争いが活発化する室町期になっ

て築かれたものが大半で、これは平時にあっては山麓部で生活して政事にあたり、戦時になると山上の城に拠る必要が生じてきたからであった。そして2類とした山城は、領主間の戦闘が激化し、恒常化する戦国期になって現われる城で、防御のための郭や施設が増え、石垣なども多く採用され、城として堅固な構造となっている。居館も山上に築かれるようになり、近世城郭への過渡的様相があらわれてくるといえる。以上みてきた山城の形態や構造は、いわゆる「本城」とか「陣城」と呼ばれる例からの分類であり、琢道城のような小規模な城（見張所あるいは砦など）と直接比較することは必ずしも適当ではないが、構造的には山城型式の2類とした例に最も近く、文献から推定される築城年代とも大きな矛盾はない。

つぎに琢道城の城としての性格について考えてみたい。再三述べたとおり琢道城は、規模、構造からみて「本城」や「陣城」とは考えられないものである。したがってその性格を検討する場合には、近傍の城と対比して考えることが必要となる。この場合、琢道城の東南1.5kmに位置する別当城との関係に注目しておきたい。

別当城は標高437.3mの最高所の主郭を中心に、東西及び南に派生する尾根を削平し数多くの郭を設け、各郭は角を直角ないしはそれに近い角度で削りだしている。また、防御施設である空堀も主郭直下に僅かに二条認められるだけであり、防御の城というより野戦を重要視した城であると考えられる。このような縄張りの特徴は琢道城と類似している。発掘調査の結果第1郭、第2郭とも郭の角をほぼ直角に近い角度で加工しており、空堀も第1郭北側直下に一条設けるのみで（昭和58年豪雨で消滅）、搦め手にあたる北東の尾



第9図 別当城跡縄張図
（寺井毅氏原図）

根上にも空堀や堀切は存在しない。このように防御に重きを置かない城に八雲の熊野城、松江の白鹿城など尼子氏の城に多く見られるという。[11]

縄張りの特徴の比較のみで築城者を特定するだけの考古学的資料の蓄積は無いが、敢えて論ずるなら琢道城と別当城は縄張りの類似性から、尼子氏方の手により築城または改修されたと推定することができる。

『陰徳太平記』によると、永禄元年（1558年）毛利の武将吉川元春が川本の小笠原攻略のため、安芸の熊谷信直、天野元定、備後の杉原盛重、石見の出羽元実、福屋隆兼、益田藤兼など8800余騎とともに上出羽（現瑞穂町田所）に布陣した。これに対し、小笠原救援のため尼子の武将本城常光をはじめ宇山信久、温泉惟宗、牛尾幸清など8000余騎で下出羽（現瑞穂町高原）に布陣し合戦が行われた。[12]いわゆる石見出羽合戦である。この時、毛利方が滞陣した城が二ツ山城で、尼子方が駐屯した城が別当城といわれている。

西ケ谷恭弘氏は『日本史小百科城郭』[13]の中で、戦国大名の領国内においては、いわゆる本城を軸とした「支城制」の配備がなされ、各支城の機能的な呼び名は支城（本城に対し、支城領を形成する一定区域の在地支配の中心となる城）、繋ぎの城（本城と支城の間にあって軍勢移動に伴う駐屯地的な城）、伝えの城（情報伝達を目的とし築城した城）、境目の城（敵と接する領国境線上や、進攻を目的とした最前線基地に築城した城）、取手、向城（敵の領国内や、敵城を攻める場合の前線基地）、陣城（大軍が敵地に進攻する場合の最前線の兵站基地を兼ねた陣営）であると述べられている。

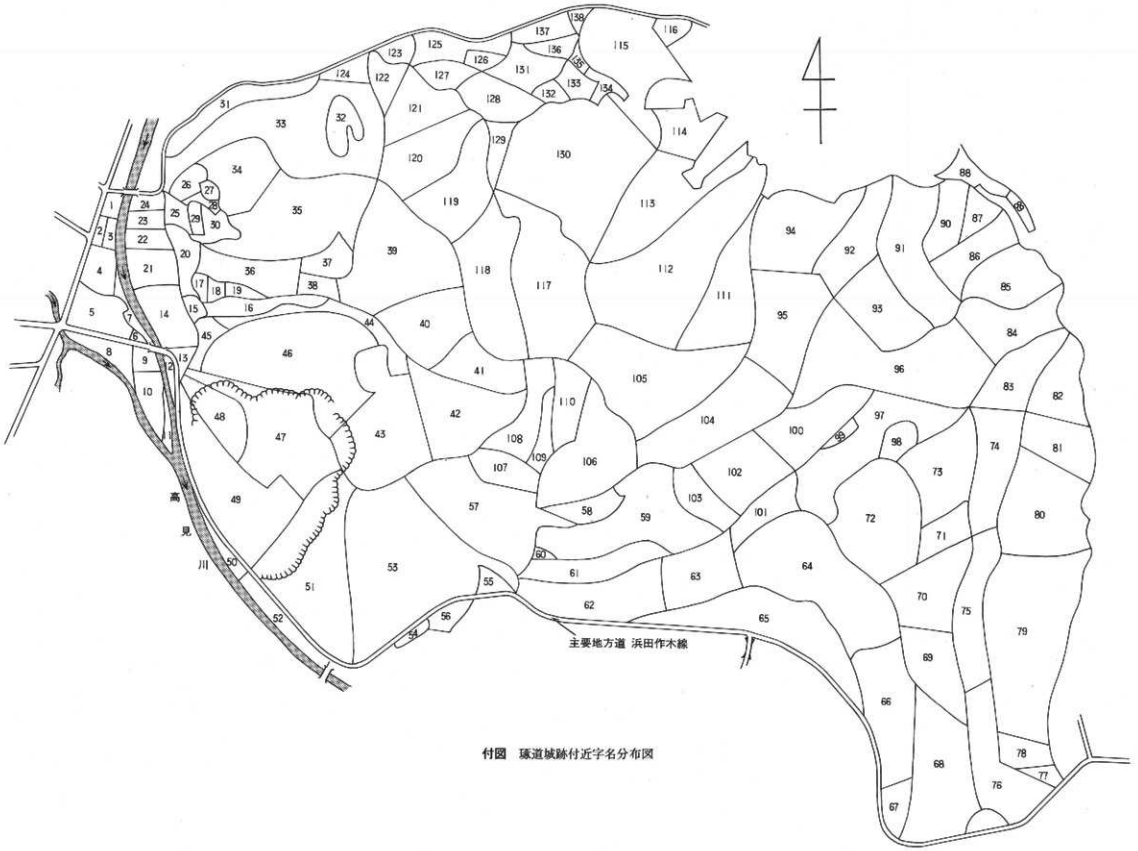
西ケ谷氏の「支城制」に当てはめると、別当城は、その城の規模からして、出羽合戦の時尼子方が毛利との合戦の最前線の兵站基地を兼ねた「陣城」として築城または改修したと推定され、琢道城はその規模や地理的条件から、出羽合戦の折、小笠原氏の荻原城（安城）、銭宝城と最前線基地である別当城間の情報の伝達を目的とする「伝えの城」「境目の城」として機能したと考えられる。また、馬場集落を挟んで指呼の間に所在する黒岩城は毛利方の城と伝えられ、黒岩城に布陣する毛利軍に対する「向城」であった可能性も否定できない。

以上述べてきたことから総括すると、琢道城は、戦略的にきわめて重要な位置を占めていることから考えて遅くとも15世紀後半には国人領主の高橋（本城）氏または小笠原氏によって城地が選定され、その後、石見出羽合戦のあった16世紀中頃に

は別当城とともに尼子方の武将によって整備、改修された山城で、「伝えの城」「境目の城」または「向城」として別当城と一体となって機能していたと考えることができそうである。

注

(1) 瑞穂町教育委員会 『瑞穂町内遺跡分布図』（Ⅰ～Ⅳ1985. 1989. 1990. 1991年）。
(2) 天津亘 『石見誌』（1925年）。
(3) 本城氏は尼子の部将として戦国期には出雲国須佐の領主となっているが、阿須那を本拠地として大勢力を誇った高橋氏が応仁の乱以後、高橋久光が尼子氏と結んで出雲に本拠を得たのちは、出雲では本城氏、安芸、石見では高橋氏を名乗っている（『角川日本地名大辞典 島根県』1979年）。
(4) 岸田裕之ほか「戦国争乱と毛利氏の統一」（『広島県史』中世 通史編Ⅱ.1984年）。
(5) 内藤正中編 『角川日本地名大辞典 島根県』（1979年）。
(6) 岸田裕之 『大名領国の構成的展開』（吉川弘文館1983年）。
(7) 注(6)に同じ。
(8) 森脇太一編 『邑智郡誌』（1937年）。
(9) 三上鎮博 「中世一小笠原氏領有時代」（『川本町誌』1977年）。
(10) 河瀬正利 「広島県における中世山城跡について」（『芸備地方史研究』第110.111合併号. 1977年）。このなかではⅠ上居型式、Ⅱ山城型式、Ⅲ沼田城型式、Ⅳ水軍城型式、Ⅴ平城型式の５つに分類されているが、瑞穂町内の城に係るものとしてⅠ、Ⅱ、の２つに大別した。
(11) 寺井毅氏のご教示による。
(12) 『陰徳太平記』32巻。
(13) 西ケ谷恭弘『日本史小百科城郭』（1988年）。



付図　琢道城跡付近字名分布図

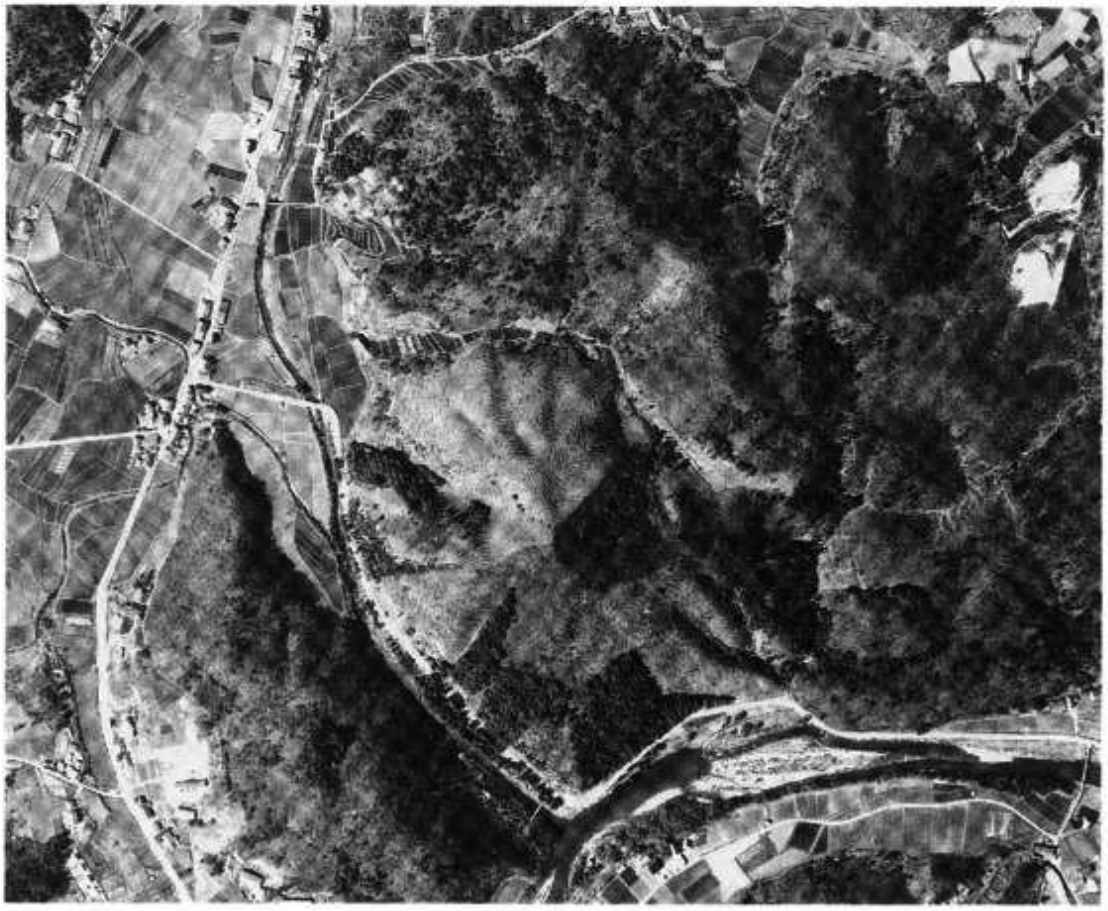
付表　琢道城跡付近字名一覧表(番号は付図に一致する)

No.	小字名	No.	小字名	No.	小字名
1	田本防水口	33	犬上岩	65	ヒエン原
2	上松川	34	天上岩	66	ヒエン原
3	上松川々手	35	天上岩	67	ヒエン原
4	上松川	36	新ヶ迫	68	ハカンドウ
5	下松川	37	新ヶ迫	69	都賀屋奥下モ
6	下松川	38	新ヶ迫	70	都賀屋奥
7	下モ松川	39	新ヶ迫	71	都賀屋奥
8	下松川	40	新ヶ迫奥	72	大歳ノ谷頭
9	下松川落井	41	新ヶ迫奥	73	大草田
10	川下モ	42	新ヶ迫奥	74	大草田
11	下モ松川	43	新ヶ迫	75	大草田
12	新ヶ迫沖	44	新ヶ迫	76	大草田
13	新ヶ迫沖	45	新ヶ迫	77	原屋後戸
14	新ヶ迫沖	46	新ヶ迫	78	段ジ山
15	新ヶ迫尻	47	丹戸城	79	大手平
16	新ヶ迫々田	48	川下モ	80	大手平
17	新ケ迫尻道両脇	49	川下モ	81	黒瀬坂
18	新ヶ迫家廻り	50	川下モ	82	大歳ノ谷上へ
19	新岡	51	高見川平原共	83	中倉
20	新ケ迫山尻道下り	52	高見川平原共	84	大歳ノ谷
21	新ヶ迫沖	53	丹戸城ノ平	85	歳ノ上エ
22	新ヶ迫沖	54	丹戸城ノ平	86	釿床上エ
23	寺ノ前下切元除地	55	中ソ子	87	林ノ下へ
24	寺ノ前下切元除地	56	中ソ子	88	川原田上へ
25	寺ノ前迫田元除地	57	船山より柳ヶ谷	89	釿床上エ
26	寺ノ前右平元除地	58	登り尾出口	90	神ガンフロ
27	盛椿寺境内地	59	船山より柳ヶ谷	91	正ノ神田
28	寺ノ前左平元除地	60	弓木谷	92	正ノ神田
29	門前元除地	61	船山雨平	93	正ノ神田
30	犬上岩	62	船山雨平	94	岡迫空
31	柏ケ峠	63	船山より柳ヶ谷	95	弓木谷
32	入野坂	64	屋タ山	96	中倉

No.	小字名	No.	小字名	No.	小字名
97	中倉	116	宮山	135	山本一ツ町
98	中倉頭	117	布ノ屋奥	136	五郎左田
99	中倉頭	118	山根山	137	古ヤシキ
100	中倉	119	竹ヶ谷		
101	中倉	120	ツエスケ		
102	船山	121	山根		
103	ヒエン原空	122	頭ヶ峠		
104	弓木谷	123	地主平		
105	弓木谷	124	山根ヤシキ		
106	弓木谷	125	清水田		
107	弓木谷	126	山根一ツ町		
108	谷戸	127	日焼田		
109	谷戸	128	土居田		
110	谷戸	129	エゴ		
111	弓木谷	130	地主田		
112	多朗畑	131	家ノ前		
113	寺ヶ迫	132	布ノヤ		
114	宮山	133	馬ヤノセ戸		
115	宮山	134	馬ヤ沖		

図　　版

図版第1



塚道城跡付近航空写真(1：7500)

(昭和44年撮影㈱日本林業技術協会提供)

図版第２　　琢道城跡遠景

a．遠景(南より)

b．遠景(南上空より)

図版第3　塚道城跡遠景

a．遠景(東上空より)

b．遠景(西上空より)

図版第4　琢道城跡第1郭

a．調査前全景

b．調査後全景

図版第５　塚道城跡第１郭土層断面

a．東端部断面

b．東端部断面

図版第６　塚道城跡第１郭・第２郭

a．第　１　郭

b．第２郭から第１郭をのぞむ

図版第7　琢道城跡第2郭

a．調査前全景

b．調査後全景

図版第8　琢道城跡第2郭

a．土坑全景

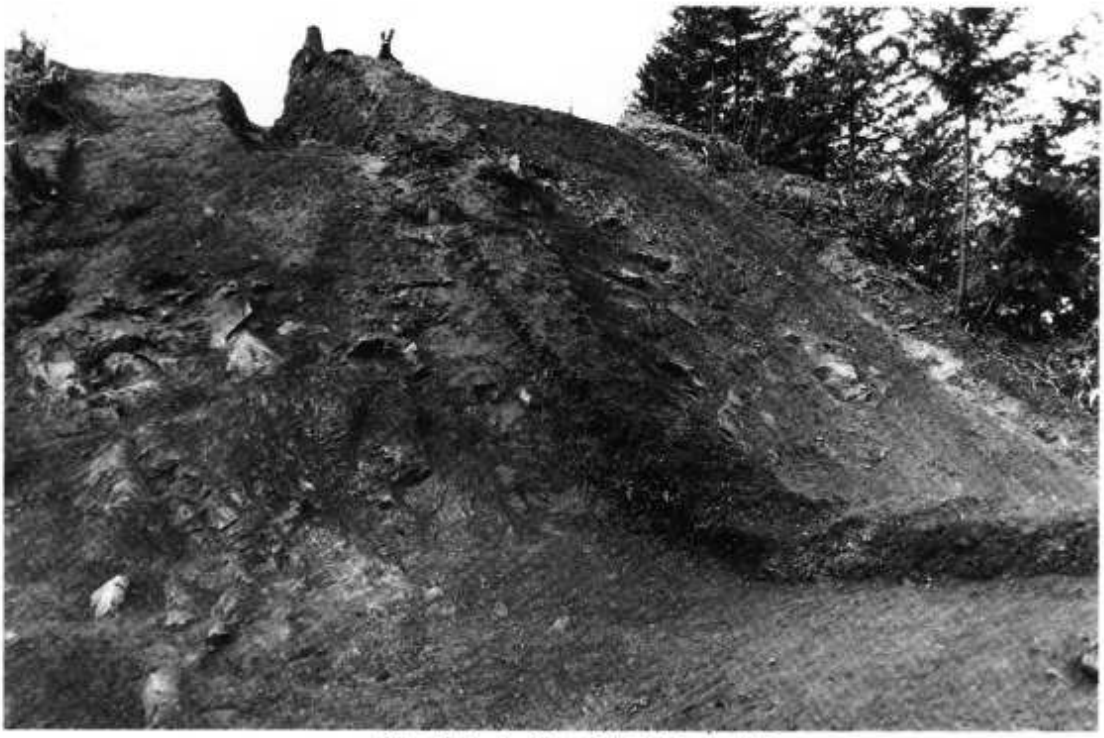
b．通路状遺構

図版第９　琢道城跡第２郭

a．ピ　ッ　ト

b．南端部土層断面

図版第10　琢道城跡第２郭・第３郭

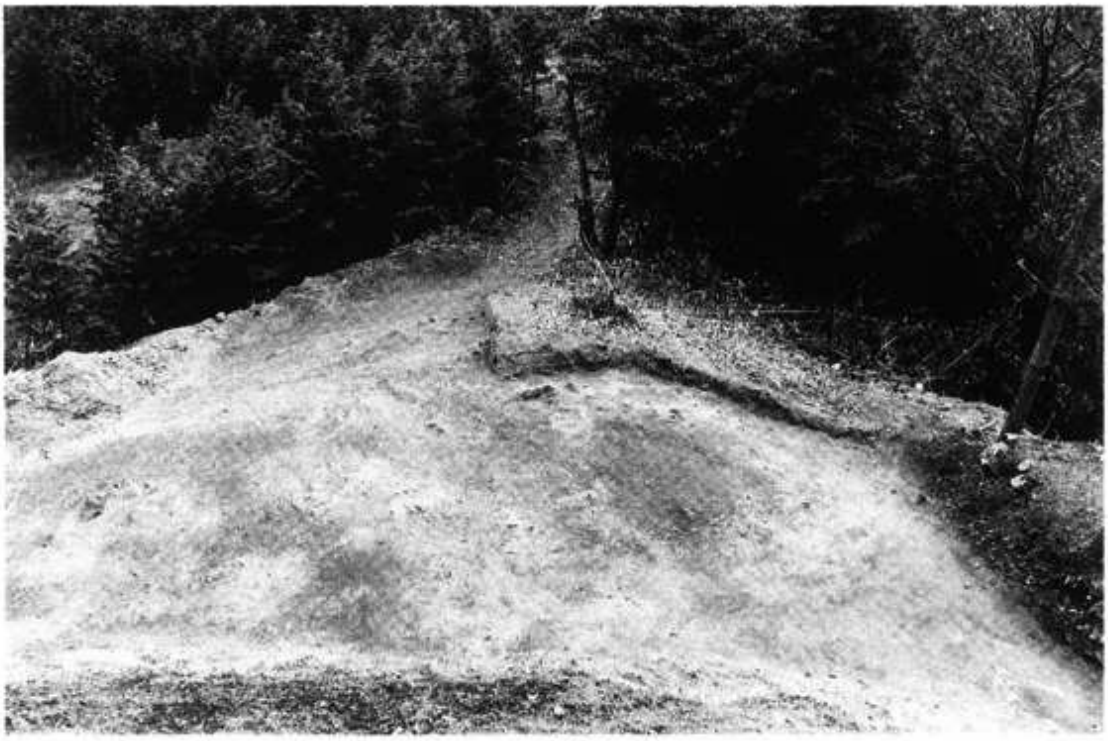


a．第３郭から第２郭切岸をのぞむ

b．第２郭切岸下端部

図版第11　塚道城跡第３郭

a．調査前全景



b．調査後全景

図版第12　調査風景

a．第１郭・第２郭の調査

b．第２郭の調査

平成4年(1992)3月10日

島根県邑智郡瑞穂町
琢道城跡発掘調査報告書

編集・発行　島根県邑智郡瑞穂町教育委員会
印　　刷　柏村印刷株式会社